

た。生ある限り、忘れ得ぬ満州である。私は無意識に樹の葉をちぎった。小刻みな葉はとがって、針をさすような痛みを覚えていた。

今日も暮れゆく異国の丘に、「父よ、妹よ、サヨナラ」と胸の内告げた。

鉄路警備の思い出記

福岡県 立花 貞十郎

一 海外居住の動機

昭和十一年四月、満州国派遣軍綏芬河駐屯のため博多港を出発し、同月綏芬河駐屯の憲兵隊の受験を希望したが、受験前日、当時第二十四連隊副官陸軍少佐の叔父井田君平に反対され受験できず、下士官になれとのことで昭和十二年二月現地除隊し、同二月南満州鐵道株式会社鉄路局横道河子警務段巡長を拝命した。

二 経歴

昭和十三年四月、治外法権撤廃により満州国治安部

に移管、同巡長に任命され、鉄道警護隊奉天学院に入學。十二月二十四日帰隊し、即日付で三江省佳木斯鐵道警護隊に転勤命令を受け、昭和十四年四月、同警護隊八虎力警護隊分所長。昭和十五年四月、弥栄警護分団長を命ぜられ八虎力分所長兼任並びに千振分団、追分分団の一部を担当することになり、行政、鉄道警護、警備、司法、その他宣撫工作（住民に対する宣伝）などにいたるまで責任をもつことになった。

三 弥栄村の思い出

○雉撃ち

終戦前、西弥栄村開拓団長栗田実氏及び医師早川氏と私三人で鮮系部落の水田や高地などに暇なとき再三雉撃ちに行った。多いときは百羽ぐらいの雉の集団をよく見かけたものである。私も雉撃ちが上手になり、一日最高の収穫は五十八発撃ち雉三十一羽、兎五匹をとった。

○ノロ鹿撃ち

ノロ鹿は、西弥栄開拓団西方高地並びに大梨子鎮高地にかけて、昭和十四年ごろは三十頭ぐらいの集団が

いたが、昭和二十年ごろは八頭ぐらゐの群れに減っていた。この間独立守備隊と鉄警部下と共にノロ鹿撃ちに行き、多いときは三頭撃ち止めたことも再三あった。

○猪汁と宴会

大梨子金鉱高地で猪二頭を撃ち、満系の地元の村長や牌長らと一緒に鮮系部落に行き、猪を酒の肴に大宴会を催した。このときに、鮮系たちが私に対し昔の歌を歌ってもよいかと言うので、了承すると、朝鮮独立運動の歌を合唱した。それが哀愁的で、いまだに忘れることができない。

○魚釣り大会

弥栄駅の近くの大きな沼で、佳木斯協和会と魚釣り大会を催した。元衆議院議員三原朝雄氏も参加した。付近一帯は鈴蘭や百合の花が咲き乱れていた。

○東宮大佐の写真

佳木斯鉄警団長牛方一角元陸軍中佐が八虎力警護分所初度巡視のとき、西弥栄開拓団本部を訪れ、同事務所に掛けてある東宮大佐の写真を見て、「おお東宮か、久し振りだな」と言って、ポロポロと涙を流された。

理由は、東宮大佐が少佐当時、軍人を辞め開拓団事業に専念したいと言ったことに牛方一角が猛反対したからである。東宮大佐は各開拓団では団員の父として神様のように尊敬されていた。牛方一角団長、東宮大佐、私の叔父井田徳大佐とは陸軍士官学校の同期であった。

○仕掛け小銃

弥栄村に東本願寺建設のため、団員の人たちが山奥で木材伐採中、仕掛け小銃で虎二頭を仕止め、皮は高松宮殿下と満州国皇帝に献上し、髟は満人が魔除けに盗んだ。

○家族ぐるみの耕作及び諸行事への参加

弥栄村福島部落の五人組は、満人や鮮人に耕作を任せては土地が痩せるので、八虎力と千振川近くに移住した。当時、日本軍が昭南島（シンガポール）を占領していたので、部落名を昭南島と名付け家族ぐるみで耕作をした。弥栄村、西弥栄開拓団の行事に招待され、ひとときを楽しく過ごした。運動会、お祭り、忘年会、新年会、学校関係の入学式、卒業式などいろいろあるが、五十年の歳月が流れ、当時の人たちの顔は臉の中

にありはするが名前は思い出せない。

○闇買いの女

佳木斯行きの国際列車に関係する弥栄駅及び八虎力駅の取り締まりに当たっていた折、毎日の如く闇米を担いだ多数の日本人女性を見受けたが、罰する気持ちになれず、見て見ぬふりをしたホロ苦しい出がある。

○晒し首

弥栄駅前の独立守備隊前に丸坊主にされた匪賊の生首が晒されていたが、日がたつにつれて生気のない髪の毛が四センチも伸びていた。

○鴨の大獵

警護団長視察時、西弥栄栗田団長宅の南方の小沼で台風のため鴨の大群が羽を休めていたので近づくためのために飛ばず、沼辺の雑草に這い上がったので、銃で叩き四十三羽の鴨を捕獲した。

○雁猟

昭南島部落の水田に八の字型で飛来してきた雁の集団を待ち伏せしていた三島署長と私は、一、二、三の声の合図で共に立ち上がり発砲し、列の中から二羽の

雁が一緒に大きな音を立て地面にバタリと落ちるのを見て、二人は顔を見合わせ微笑した。

○弥栄警察と鉄道警護団の関係

警護団は、行政権・司法権・警備権・愛路工作宣伝を、鉄道路線を中心に両方十キロメートルを施行する関係で、全国的に警察との問題があったようである。

一例をあげると、モルヒネを所持した私服警尉(警部)を八虎力駅で検問中検挙したが、警察との摩擦を生じた。また八虎力において匪賊対策のため、駅前より百メートル離れた大梨子溝方向に、部落民を使用して長さ百二十メートル幅一メートル、高さ一メートル二十センチの土の防壁を造成したところ、日系警尉補よりなぜ部落民を使用したかを強く干渉された。「貴官は鉄警に対する勉強不足で、威張るばかりが警察官ではない」と、私は軍人である鉄警その他につき勉強不足だと回答した。

○警察本部主催で行われた協議会

協議会は、鉄警分団長以上、警察は日系警尉補以上、全員で約百人ぐらいでの懇親会で、双方とも知人や同

郷の県人会などで、和やかに行われ終了した。

○弥栄署長の転勤

弥栄署長の転勤は、県本部総務部長、協和会三原朝雄、私の兄豊福勝馬の協議の上、三重氏が赴任した。

○阿片吸引所

大梨子部落は八虎力駅から約五キロメートルの地点で、砂金鉱による千五百ぐらゐの特殊村で官営の阿片吸引所があり、密偵がそれぞれ潜伏しているが、取り立てて不穩の動きはない。

○佳木斯警察署派出所長の逃亡事件

昭和十九年二月佳木斯警察署派出所長が、日系一色警尉とその妊娠中の夫人を殺害し、銃薬弾薬などを持って逃走した。同派出所長は元匪賊頭目謝文東の帰化した護衛であった。

○佳木斯鉄警長発屯分団長の逃亡事件

昭和十九年七月三十日夜間、同分団長が部下と共に軽機関銃、小銃、弾薬全部を持って逃亡した。

○紀元二千六百年祭

日本で行われる紀元二千六百年祭に、私の実兄豊福

勝馬を隊長とする、日・満・鮮・中・蒙の五カ国の五十人義勇奉公隊が参加し、弥栄村からは、開拓団の山崎指導員元陸軍少尉が抜てきされ、小隊長として参加された。

○関東軍報道部長参謀大佐の講演

昭和十九年七月三十日、弥栄村小学校において、関東軍報道部長参謀大佐の講演があり、日本軍は絶対に負けないとの内容を中心に約二時間の講演があり、最後に関東軍万歳を三唱して講演が終了した。

四 ソ連軍満州国侵入

佳木斯鉄警日直司令高橋中尉が弥栄鉄警分団長立花に対し、「本日午前一時六分、佳木斯市忠靈塔付近にソ連機が爆弾を投下した。本団は非常警備について」との連絡があり、「引続きソ連軍が満州国に侵入中」との第二の連絡もあった。私は直ちに分団員の非常召集を行い、弥栄駅長並びに保線区長に通報したところ、駅長の回答は、「本日午前四時より防空演習があることになっている。何かの間違いではないか」と回答があったので、更に高橋中尉に確認すると、「演習では

ない。佳木斯では既に戦闘配備についている」との回答があった。再度その旨を駅長、保線区長に通報すると共に、弥栄警察署長、弥栄開拓団各幹部にも連絡し、西弥栄開拓団や関係開拓団へ通報するよう依頼した。部下に対しても、警察並びに部落長との連絡を密にし情報収集を行うようにしたところ、満人部落の一部では動揺はしているが、不穩の動きはない。しかし鮮人の有力者は家族と共にいち早く逃亡していることが判明した。

この日、ソ連が黒龍江を渡り撫遠^{フヤン}県に侵入したので、私の義姉は四歳の子供を殺し自決した。兄勝馬は撫遠県協和会事務長（元副知事）だったが、八月二十九日、ソ連軍に包囲され自決した。

○佳木斯の列車運行状況

八月九日午後一時ごろから、日本軍人及び家族を満載した軍用列車や普通列車が数十回にわたり牡丹江に南下し、翌十日も引き続き避難列車が数十回南下した。同夜午後八時ごろに佳木斯鉄道員家族及び鉄警家族らも南下を始めた。同日昼ごろ、弥栄開拓団長山崎氏か

ら私に対して「浜綏線山市に日本人幹部養成のため農学校程度の校舎を建設中で、そこへ行くために駅で切符を買おうとしたが売ってくれないので、切符を確保していただきたい」との依頼があった。しかし既にソ連軍が満州国に侵入しており、日本軍人及びその家族も九日から現在もあのとおり南下中で、弥栄開拓団は現在老人、子供、婦女子のみが残留し、また西弥栄団長栗田実氏も召集されているというような諸情勢を考慮されて思い直すようお願いし、浜綏線山市行きを思いとどまってもらった。

○弥栄村連絡協議会（主催弥栄村）

一、日時 八月十一日午前中

二、場所 弥栄村、村公所二階

三、出席 工藤村長、助役、村公所幹部、指導員及び有志、山崎団長、警察署長、鉄警分団長

立花、駅長

四、協議事項

- (1) 弥栄村の今後の対策について
- (2) 弥栄村の引揚げについて

イ 期日は一刻も早くする

ロ 引揚列車の要請は、警護分団長と駅長に一任する

ハ 警察及び警護分団の警備の強化と満鮮系開拓団の動向について

ニ 部落、警察、警護分団の連絡の強化を図る

ホ 弥栄村と駅との窓口は警護分団とし、引揚列車の要請は千振駅長に対しても要求する

○日系警察官の召集について

八月十一日、日系警察官三人に対して召集令状がきた。その日、討伐より帰署したばかりであり、そのことについては警察署長と警護分団長と相談の結果、私と署長が責任を負うことにして召集を差し止めた。

避難列車が数回にわたり南下した。十一月千振駅及び同開拓団との連絡は可能であったが、千振警護分団長柴田君ならびに閩家分団長山田君は連絡を数回するも所在不明で、連絡不可能であった。

避難列車の交渉については相当困難を要した。その手始めとして各駅長を督励したが、要領を得ず不首尾

に終わった。

佳木斯鉄道中央機関区長、列車区長、列車配置区長、列車司令にも連絡したが、目下のところ佳木斯列車区関係は混乱中であつたので、各区長に対し弥栄開拓団員を見殺しにするのかと云って、今から私がモーターカーで佳木斯に行き承知しないなら覚悟して下さいと言つたとき、幸いにも元弥栄駅長が列車配置の責任者でいて、「立花さん、列車は私が責任をもって何とかしますから待っていて下さい」との回答に接した。折り返し田中氏より「列車を確保したので、運行は勃利駅まで行き、引き返し閩家駅、千振駅、八虎力駅、弥栄駅に行かせますので、各関係団体及び各開拓団に連絡されて安心されますように」と連絡があつた。なお千振鉄警分団長、閩家鉄警分団長に連絡するも所在不明であつた。

○弥栄村引揚列車決定連絡

八月十一日午前七時ごろ、佳木斯鉄警団長から、避難列車が八月十二日午前九時ごろ弥栄駅に到着の予定との連絡を受けたので、直ぐに弥栄警察署及び弥栄村

公所に連絡すると共に、西弥栄開拓団、関係団体にも連絡を依頼した。

○弥栄開拓団の引揚げ当日

十二日、ソ連軍が密山駅を突破したので、列車による南下は不可能との情報を得た。

同日早朝、牡丹江方面より佳木斯に逆に北上する列車が数回あった。避難列車は佳木斯駅より午前七時弥栄駅に到着、勃利駅まで南下し引き返してきた。

早い人は午前六時ごろより満人の馬車で弥栄駅に集まり、駅前の弥栄旅館前付近の道路で満人と涙を流し別れを惜しんでいる人も数人いた。午前八時ごろまでに全員集合を完了していた。列車到着は八月十二日午前十時ごろで、千振、閻家開拓団の一部、その他一般人も乗車していた。弥栄、西弥栄ならびに関係開拓団、一般人は全員乗車した。日系警察官は三重署長以下四人乗車、西弥栄開拓団庄司夫人（山形県出身）は病状悪化のため動かすことができず、本人の意思に従い残留することになり、後事を満人小作人に依頼した。夫の庄司氏は応召中で不在であった。

千振地区ではソ連軍を防衛するとか、千振開拓団は作物が豊作で秋の穫り入れが終わるまで残留するとの情報があった。千振警察署長は残留し、暴徒に襲われ重傷を負い、新京まで避難した模様であった。三重弥栄警察署長は、「本庁警察次長が残留すると言っているので、自分も署長として残留する」と言っていたが、日本軍も既に後退しており、当地の満鮮系の動向もよくなく、また一人息子さんもきておられるので、团长や村長もおられるが避難の開拓団の保護を任務として是非一緒に引き揚げていただくよう説得し、やっと納得してもらった。

私の妻は佳木斯満鉄病院に入院中であったが、八月十日事態の急迫に伴い、支中士（軍曹）を迎えにやった。しかし歩行困難なため妻は自決を覚悟していたようで、やっと説得に応じてくれた。十二日、山崎团长と三重署長に、万一の場合は、妻の覚悟のことをお願いし、ボーイをつけ乗車させた。

その前日の十一日早朝、山崎团长を訪問し、ソ連軍、日本軍、牡丹江市内、満鮮系人及び弥栄開拓団員たち

の状況を報告し、避難列車の件も打ち合わせしたが、その際、妻の自決の意思を伝え、万一の場合は、お嬢様と同様によろしくと依頼した。

そのときの団長は、羽織袴姿で正座され応対してくだされたが、勝海舟に似た古武士を忍ばせる風格があった。二人のお嬢様も父上に似た立派な方で「この父にしてこの子あり」とはまさに山崎団長父娘を指した諺であろう。同氏はかつてのシベリア出兵に従軍された砲兵中尉であり、東大出身の方で、当時義勇隊二千人の訓練所長であった。

八月十二日、私は司法、ソ連関係情報、その他秘密文書などを焼却し、妻の衣類など全部満系部下、密偵、連絡員に与えた。三重署長より引き継がれた弥栄村公所の全部の鍵（事務所、倉庫、その他）は、翌十四日警察署次長張警尉に渡した。八月十二日、料理人を呼び、分団員の家族及び連絡員を集め懇談会を催したが、不穏な動きはなかった。三重署長はなかなかの人格者で、私とは兄弟分の盃を交わした仲であった。警察と鉄警分団との協調関係は非常に良好で、部下たちも親

しく交わっていた。

○引揚げ

八月十三日午後一時ごろ、翌十四日部下と共に鉄警本団に帰団せよとの命令があった。弥栄村東本願寺に預けていた亡き長女佳代子の遺骨をとり、十四日早朝、騎馬で行ったところ、村内住宅は至る所が荒らされておき、全く悲惨な有様であった。寺も同様であり見る影もなく、ポツリと長女佳代子の遺骨があり、複雑な思いで持ち帰った。また各部落に通ずる電線、電話線も切断されていた。

かねて佳木斯駅分団長山口氏から同構内の避難民、鶴岡沿線の新潟開拓団及び奥地の鶴岡炭鉱や一般人の食糧が欠乏しているとの報に接していたので、先発のとき、部下の鉄警分団員により村民を指揮して、弥栄村倉庫から米麦、味噌、醤油、小麦粉、弥栄葡萄酒、ビールなど二台の無蓋貨車に積み込んだ。鉄警分団員家族、連絡員に二カ月分の各種秣を分配し一切の作業を終わり、前日の鍵を張警察次長に手渡した。

最後の無蓋列車は八月十四日午後五時ごろ到着した。

弥栄警察官、鉄警分団員の家族、村民有志たちの見送りを受け、部下と共に佳木斯に出発した。

佳木斯駅構内の状況は、避難民を満載した有蓋、無蓋の列車が各線ごとに溢れて、列車間も避難民で足の踏み場もないぐらいですさまじい混雑を呈していた。その中に司令部将校たちの姿が見え隠れしており、また時折白系ロシア人が日本軍将校の服を着て走り回っていた。日本軍の複葉飛行機が超低空で駅の上を飛ぶこともあった。装甲列車内で鉄警団長に対し帰隊並びに現況情報を報告したが、何も回答がなかった。佳木斯駅鉄警分団長に対し貨物列車の積荷の食糧などを申し送った。日没後、新市街・満鉄病院方向の社員住宅街などが一面火の海となって炎上するのを、装甲列車の屋上より酒を酌み交わしながら眺めたが、まさに落城に似た悲壮な状況で、いまだに印象深いものである。これは、佳木斯撤退のため特務機関並びに工兵隊の放水によるものであった。

ソ連軍との戦闘は、八月十五日午前十時三十分、有力な匪賊が蓮江口付近に出現との密偵の情報により、

早速装甲車を現地に急行させた。途中松花江鉄橋（橋の長さ千五百メートル）に差しかかるとソ連戦車二台の砲撃を受けたので、橋を通過後、我が方も山砲で応戦したが、第二、第三回の猛攻撃のとき敵弾が機関車のボイラーその他数箇所に被弾し、列車は傾き運行不能となり、満鉄監理所長、医師数人その他多数の戦死者を出した。特に暑さが厳しいので、後尾の無蓋車に移動していた満鉄病院救護班看護婦五人及び保線助役は敵戦車砲の直撃弾を受け一片の肉魂も残さず散華した。鉄警団長の指揮が十分でなかったのだ。私は装甲列車の屋上で敵を監視していたので、幸いに戦死を免れたが、これは母が送ってくれた千人結び並びに成田不動様のお陰と今だに感謝している。

敵戦車が後退したので、我々も列車を捨て山中に撤退し依蘭イランに向かった。途中満人部落で昼食中、私を見て先生だと言って懐かしがり、豚を殺して御馳走してくれたが、別れ際には、各種お土産物までもらった。

この部落の人は元八虎力部落民であり、昔、青少年の教育を私から受けた人たちであった。

依蘭に向かう途中の山中で、千振開拓団員に出会ったが、既に暴徒に襲われていたらしく、見るも哀れなありさまで、婦人のほとんどが我が子を抱きながら歩行ができず、地面に座り込みあるいは寝たまま、私たちに對して殺してくださいと悲壯な声で哀願したり、飢えと疲労のために絶命寸前の我が子に、にぎり飯を傍らに置いて、泣く泣く山中を南下した者も数十人いたようである。

我が子を見捨てて行く母親の心情を思うとき、まさにこの世の地獄絵図であり、同情の涙を禁じ得なかつた。依蘭に着くまでの間、幾つかの開拓村を通過したが、いずれも弥栄村と同様に荒らされており、また婦女子、老人の死体が多数家の内及び道路上に放置されていた。私たちは依蘭市街近くの山中に行くまでに、反乱の満軍、警察、暴民と幾度か戦闘をしながら戦死者も出した。依蘭は既にソ連軍に占領され、日本軍は武装解除されていた。山中でソ連の飛行機が低空で、上空から「日本は戦いに負けたのだ。戦争は終わっているのに、なんのために戦うのか、早く出てきなさい」

と日本語で書いた宣伝ビラがまかれた。

依蘭市街に入れないので、さらに哈爾濱ハルビンに向かう途中、浜綏線フフシウ布洛尼フクロニ駅西方の奥地でソ連兵に包囲され、武装解除を受け牡丹江地区の海林收容所に送られた。

○日本人の密告

新京において日本人の密告により公安官（警察）とソ連のGPU（ソ連の国家政治保安部）に踏み込まれたが、寮長元県課長の機転で、「室の天井の棚の上は危険であるから私の横に寝なさい」と言ったので、その通り床に入ったので逮捕を免れた。公安員の一人が棚に上ったがだれもいないので、そのまま室を出て行った。逮捕されていれば銃殺か、ソ連行きは免れなかつた。

八月九日、ソ連が満州に侵入以来秋にかけて、北満や満州全域から日本人避難民の群れがまるで乞食のような惨めな姿で続々と新京に南下してきたが、何の希望もなく、生き延びて行くためには何かと職を探しながら、ただひたすら帰国できる日を待ちわびていた。私もその一人で、ポロポロになった戦時服に鍋、飯盒、

食糧、薪炭など、全財産をぶち込んだ駄袋かまきを背中に担ぎ、妻を探し求め新京にたどりつき、やっと巡り合えた。私が妻に会うのが三日遅れていたら、妻は生活苦で自決をしていたと思われる。

私は、二日後発疹チフスで倒れ、どうにか起きれるようになったとき、今度は妻が発疹チフスに感染し、高熱であえぎながらうわごと「一日も早く日本に帰りたい。リンゴ一つ食べれば死んでもよい」と言ったが、高価で私たちの手に入るものでなかった。

昭和二十年十月新京市で自由労働及びパン小売りで最低の生活をした。

満州国が滅亡して五十年になるが、第一次・第二次開拓団の方々は、武装開拓団として国防の一翼として入植され、片手に銃を持ち耕作に専念されて成功された。その間弥栄十周年が盛大に施行されたが、ソ連の侵入により多くの団員の方々が召集され、一家は莫大な財産を捨て、南下し帰国するまでも悲惨な最期を遂げられ、あるいは帰国後も多くの方が亡くなられたと承っている。

○帰国

昭和二十一年九月十五日帰国。留守宅では主食・糖粉雑穀の卸・小売りをしていたので、妻と共に従事したが、頭を下げることでできない性分なので、その後月給取りとなり、地元町役場に就職した。その後もうつつかの職を歴任し、現在に至っている。

屋敷が広いので、昭和三十五年から葡萄三反、キウイ三反を家族及び臨時人夫と共に栽培もしている。

○鉄警死亡者の霊と再会

終戦後半世紀を経過した今日、佳木斯鉄警団の戦死者が密教真言宗の霊媒により現れ、私の終戦当時の思い出を一層深くした。

私の実兄が先年九十歳で他界して以来、身内及び我が家においていろんな問題が発生し、困惑していた。そんなとき、ある人から祈禱師のよい人がいるので、一度みてもらおうとよいのではと紹介され、私は一笑に付したが、寺に行ったら、十二時までに来て済度を受けなさいとのことで済度を受けた。その結果二十五年ぐらい前の軍人の霊が憑いていると言われた。二十年

八月十五日、蓮江口橋梁においてソ連軍戦車と我が軍の装甲列車が戦火を交えたとき重傷を負った、新潟県岩船郡山北町佳木斯団俊徳分団長野瀉一彦氏と佳木斯鉄警団愛路保准尉萩原貞雄氏と判明した。

済度は三時間ぐらいで終了したが祈禱師と信者三十人が約一時間読経し終わると、上段の私に向かい、「戦友」の歌を数回歌った。祈禱師は「立花さん頼みます」と挙手の礼を何回も繰り返し、涙をポロポロと流しながら、何やら呟いていた。横に座っていた老婆が「どなた様ですか」と私に尋ねたが、私が「心当たりがない」と答えると、祈禱師は泣きながら挙手の礼を何回となく繰り返し、「約束したではないか」と、数回にわたり問いかける。私は、はっとして「お前は野瀉ではないか」と言うと、「そうです、行くところがないので私を祭ってください」と言うので「よし俺が生きている限り貴官を家において祭るから安心して成仏してくれ」と言うと、祈禱師は「立花さん有り難うございました」と言い、ポンヤリ下を向いている。するとさらに祈禱師は、「ほかにも軍人がいますよ」

と言うので、「私は知らない」と言うと、家内が「野瀉さんの時より激しく泣いている」と言い、祈禱師と老婆は、野瀉君のときと同様、同じことを数回繰り返し、本人は背が低く法螺吹きで足が悪いと言ったので、私は瞑想に耽り、やっと一人の男の姿が浮かんできた。「お前は萩原君か」と聞くと、祈禱師は「そうです」と答えた。「君には奥様と子供がいたではないか」と言うと、「妻が再婚したので行くところがない」と言ったので、「よし俺が野瀉君と一緒に祭ってやるので安心して成仏してくれ」と言うと祈禱師は「戦友」の唄をうたい失神状態となり、その場に倒れた。信者が一斉に念仏を唱えると、三分位で本性に立ち返った私たちは、二人の位牌を持ち帰り家内と共に般若心経を三回、時には三十三回も唱えた。

○若き日の思い出の写真について

藤巻禧四郎先生から、弥栄村有志、山崎団長、工藤村長、藤巻先生の父上医師藤巻新蔵氏の写真ならびに弥栄病院開院記念写真を見せていただき、その中に美兄豊福勝馬も写っていて、当時の若き日の満州の思い

出が次から次に浮かんできて懐かしく思われた。

○俊徳開拓団・新潟開拓団について

昭和十九年、佳木斯鉄警俊徳分団長の野瀉君から、一発で二羽の雉がとれるので撃ちにきませんかとの誘いがあり、二人で出掛けたが、雉は少なく、二羽を捕ったのみで、その後、当時私の友人が新潟開拓団にいたので訪問した。

新潟開拓団は十九年三月ごろ入植していたが、家中は、弥栄開拓団と違い畳のかわりに筵が広げてあり、その上に布団が敷かれ、二歳ぐらいの子供を寝かしており、薪はなく萱を燃やしている有様で、朝の味噌汁の代わりに水を温め中に塩ということであり、悲惨な生活ぶりだった。

私は団の行政とは関係はなかったが、悲憤を感じ、開拓団長がどんな人か事情を聞きたいと思い、野瀉君と開拓団長宅に向かったが、団長宅は不在だった。日本人として何とかすべきだと思い、その後西弥栄開拓団から味噌二樽を買い送った。

開拓団に希望を持ち入植されたのだろうし、日本で

は家屋敷などを売ってこちらにこられたのではないか
と思い、また二年あまりで終戦になり、その生活は大
変だったろうと、今だ事あるごとに脳裏に浮かぶ。

小さな赤いノートから

長崎県 東 清子

戦後五十二年の思い出、書きたいことがいっぱいあ
る。あまりにも多くて、何から書いたらよいか一瞬戸
惑う。

満州国海辺警察隊勤務で警備艦「海王」の航海長で
あった主人は、満州国の建国記念日（昭和九年三月一
日〜十日）の休暇を利用して、私との結婚式を挙げる
ために帰国した。三月三日式を済ませて、五日門司港
から満州へ向かった。大連港に上陸し、警備艦の基地
のある旅順へ向かった。

旅順―大連―営口と移り住み、華やかな楽しい生活
が続いたのも東の間、大東亜戦争が昭和十六年に始ま